

【体育科】

「わたし」と「運動」の関係を創る

～ よりよく「競争」をたのしむために ～

0 はじめに

(1) チャンピオンスポーツ



2004年8月、金メダルラッシュにわく日本。寝不足に負けず日本選手の活躍に興奮していたのはわたしだけでしょうか？特に、「お家芸」と言われた体操の28年ぶりの金メダルは、「快挙」の一言で言い表すには簡単すぎる気がする。

全員がプロの選手から構成された野球は、残念ながら悲願の金メダルはならなかったものの、それは、まさにドリームチームであり、その強さは他チームを圧倒していたのではないだろうか。チャンピオンスポーツの頂点に位置づ

けられているプロ野球の選手たちで構成したことは、今後の野球人気を支える大きな要素になっていくだろう。

我々が、寝不足になるほど日々の結果に興奮するのは、スポーツのもつ醍醐味である。それを先鋭化し、大きな大会にしたのがオリンピックである。鍛え上げられたアスリートたちの戦いに夢を感じ、感動するのは、メディアの力による「観るスポーツ」の発展といってよいだろう。

(2) お気軽スポーツ

現代社会における『スポーツ』は、余暇時間の増大と嗜好の多様化、健康指向から、我々、現在人にとってなくてはならないものになってきた。それに伴って、「気軽に」、「簡単に」、「楽しく」といったニュースポーツ、市民参加のイベントが増えてきている。このことは、公園などで、ウォーキングやジョギングをしている人の数をみてもわかることであろう。

チャンピオンスポーツとお気軽スポーツ、対極軸にあると思われがちではあるが、「観る」、「おこなう」という参加形態が多様化しているだけで、「スポーツを楽しむ」という本質はかわらない。つまり、熱狂的に応援しているのも、自分の目的で参加しているのも、どちらもスポーツの楽しさなのである。

(3) 小学校での体育科

それでは、小学校で体育科をおこなう目的はいかなるものなのであるだろうか？

学習指導要領では、『心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。』を目標としている。その中で、究極的な目的は、『楽しく明るい生活を営む態度を育てる。』ことである。つまり、生涯にわたり運動やスポーツを実践

していくための基礎を培うために、自らもっためあてを解決していくためのプロセスを学習させることが体育科の目的なのである。

基礎学力論がもてはやされる昨今の教育の現状を鑑みると、「楽しい体育」の中心的な学習スタイルである「めあて学習」に対する批判があるのも事実である。しかし、体育科における基礎学力とは何かという議論がないまま、構造的特性の細分化により技術を身に付けさせることが基礎学力であるかのような風潮があるのも周知の通りである。上記のように、体育科の目的は、その子が生涯にわたり楽しく明るい生活を営む態度を育むことであり、そのための基礎学力というと、バランスよく運動の楽しさにふれていくことであろう。そのために、一つの要素として技術の向上があると考えるのである。

1 「意味と内容」がひろがる体育科の学び

(1) 体育科における「意味と内容」とは

学校提案の“「意味と内容」がひろがる学びの創造”を体育科で述べていく前に、体育科での「意味と内容」についてふれることにする。

ここでは、具体的に一つの運動にしぼって「意味」「内容」を考えていきたい。

『バスケットボール』を例としてあげることにする。

①-a 『バスケットボール』の意味とは・・・

ボール運動であるので、競争欲求の充足である。ボール運動は、相手チームと対戦するので、対戦相手に勝ちたいという願いがうまれる。その願いを実現したときの成就感や達成感・満足感を味わうことが中心な「意味」になる。

①-b 『バスケットボール』の内容とは・・・

バスケットの一般的特性は「チーム対チームにわかれ、入り乱れて、高い所にあるリングにシュートし、得点を競い合うことを楽しむ。」となる。得点を競い合うことが「意味」となるので、そのから導き出される「内容」は以下ようになる。

- ・得点を多くあげるためにシュート練習をする。
- ・相手を意識した作戦をたてる。
- ・ドリブルやパスを確かなものにし、チームの力を高める。

子どもにとって『バスケットボール』の意味とは、その価値ということになる。内容は、価値から導き出された願い・思いになる。

以上のように考えるとすると、体育科の「内容」「意味」とは次のようになる。

②-a 『体育科』の意味とは・・・

運動の価値を味わうこと。運動の価値にふれること。

〈運動の価値とは〉

- ・体を動かす爽快感
- ・心の解放感

〈運動の学習的価値とは〉

- ・よりよく「競争」を学ぶこと
- ・欲求充足感をあじわうこと

- ・体力・健康の維持増進
- ・ルール、マナーを学ぶこと
- ・人との交流。自然とのふれあい
- ・目的に応じた人間関係を学ぶこと

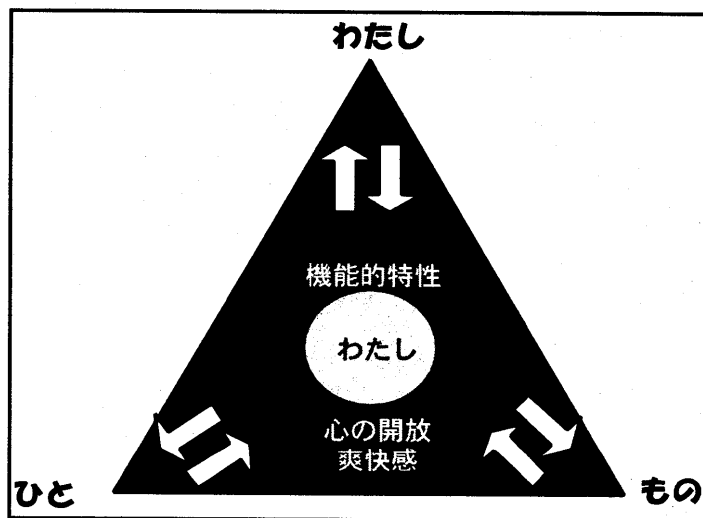
②-b 『体育科』の内容とは・・

運動そのものの価値と学習的価値があるが、子どもがおこなう体育科の内容としては、学習的価値から導き出されるものである。つまり、運動をより楽しくしていこうとすることが内容になる。例えば、「欲求充足感を味わうこと」という価値を味わおうとすれば、まず、自己の欲求（めあて）がはっきりもてなくてははいけないし、それを達成していくための方法を学習していかななくてははいけなくなる。

2 体育科でめざす子どもの姿

(1) 体育科の学びとは

体育科は、運動との関わりを学習する教科である。わたしと運動との関係構築が主眼である。関係構築とは、運動の楽しさにふれることであり、運動の中に自分の感じる価値を見いだすことである。そこには「わたし」、「ひと」、「もの」との関係がある。（平成14年度本校紀要参照）



(2) 期待する子どもの姿

学校提案でいっている「追求」から「追究」への変容とはいかなるものであろうか。

体育科は運動そのものを学ぶ教科である。子どもたちは運動と出会ったとき、その子なりのおもいを持つ。「かっこいい。」「おもしろそうだ。」などといったプラスのおもいや、「いやだ。」「にがてだ。」というマイナスのおもいである。それを出発点にしていくのであるが、いつまでもはじめのおもいが続いていくということはない。

子どもたちは学習の中で、運動の楽しさにふれていく。それは、機能的特性を中心としたものである。運動の持っている楽しさというのは、心の解放感や体を動かす爽快感といったものから、人との関わりまで幅広い。しかし、学習の中心的な内容となると上記の通り、運動の機能的特性なのである。もともと、体育科は機能的特性にふれた楽しみを味わわせることを学習内容としてきた。それは、それ自体に高まりがあるということである。つまり、機能的特性にふれた楽しみを味わおうとすると、子どもは運動を真剣に学ぼうとするのであって、本校が言うところの「追究」（本校学校提案参照）へ向かっているまなざしに変容しているといってもよいだろう。

そこで、より焦点化するために「競争」をキーワードにして、本年度の研究を進めていくことにした。

3 研究テーマ設定の理由

(1) 負け続けても

児童会役員選挙に立候補した子の立会演説の内容をみんなで考えていた。その中に「〈略〉けんかのないより良い学校に～云々～」という文言をみた数人の子の発言である。「けんかも必要だ。けんかで学ぶこともある。」わたしは、しばらく考えさせられた。選挙演説の内容としては、別におかしくない（どちらかという、普通に使う文言である）と思いがちであるその言葉は、子ども社会の中では異質なものに思えたのではないだろうか。彼らの発言はもっともなことであり、美しいところばかりを強調することのおかしさも言っているのであろう。

同じように「勝敗」を学習させようとしたとき、諍いやトラブルのない、きれいな競い合いをイメージする人は少ないだろう。トラブルで学ぶこともある。しかし、それは、ボール運動のもっている機能的特性を真剣に学習していることにはならない。彼らが、「勝つこと」を目的として「意欲的」に活動し、戦術を「考え」、それを実現するために「技術」を身に付けていくことが学習なのであり、そこから先の目的を、子どもたちが導きさせるかを実践研究の中で検証していきかけたのである。

(2) よりよく「競争」をたのしむために

子どもたちにとって、運動をおこなうことは魅力的なことである。例えば、将来のためとか、これができないと困るからといった消極的な理由でおこなっているのではなく、運動そのものの大いなる魅力にふれたいと願うことは人間としてすごく自然なことなのである。

本年度は、～ よりよく「競争」をたのしむために ～ というサブテーマをもうけた。

「競争」をよりよく取り入れることによって、学習が深まったり、教育効果をあげたりということは周知の通りであるし、教育の手法として用いられている。しかし、それは「競争」を学習しているのではなく、効果的に活用しているにすぎないのである。体育は、「競争」を手段的・効果的に用いるのではなく、それ自体を学習の目的にしてきた。「競争」は人間が生来生まれ持っている欲求である。あそびの中にそれが入ることによって、気晴らしや気分転換といったリラックスセッションから意味合いが変わってくるのがよくある。もちろん、良い点ばかりではない。人間を野蛮にさせる面ももちあわせている。学習として進化していく良い点と、人間としての粗野なところがクローズアップする悪い点の両方をあわせて学習することができるのである。子どもたちが「追求」から「追究」へまなざしを変容させようとする、道徳教育かと思えるようなマナーを中心とした学習になってはかなわないだろう。マナーの学習を否定しているのではない。より積極的・建設的な学習意欲や成果を求めているのである。

つまり、よりよく「競争」を学ぶことによって、ただ勝ちたいという興味・関心から、「いかにすれば一。」「どうしても一」といった具体的で真剣な学習になるのである。

4 体育科学習でのまなざしの共有

(1) 単元構成について

「競争」そのものを学習するのはボール運動である。毎学期、ボール運動領域を配列するのは当然のことではあるが、配列の工夫が必要になる。そこで、ボール領域の中で、各々の運動がもっている特色を考えてみることにした。

◇ バスケットボール型、サッカー型

小学校期では、個人の能力差が大きく左右するので、チームより個人の願いが達成しやすくなる運動。

◇ バレー型、ベースボール型

攻守入り乱れではないので、個人の失敗が目立つが、チームの高まりによってそれらをカバーしていける運動。レクリエーションでもできる運動。ただ、ベースボール型はルールが複雑である。

◇ アメリカンフットボール型、ラグビー型

体力、体格、能力に応じた役割分担ができる運動。より高度なチーム意識が必要

以上のように、大まかな分類わけをしてみると、その運動の特徴が明らかになる。例えば、高学年の学級開き単元として「バレーボール型」や「バスケットボール型」が適しているように思う。それは、チーム意識を持たせやすいからである。チーム意識がでてくると、勝敗にこだわったゲームになったとしても、阻害される子が少なくなるだろう。

(2) まなざしを共有した授業とは

まなざしを共有した授業とはいったいどのようなものだろうか？この稿を考えるにあたって、まず考えたことは、ボール運動での理想的な子どもたちの学習の姿である。それは以下のようなものだろう。

『和気あいあいとした中で、一人一人が自己の願いを実現していこうとしていくうちに、それらが一つの方向性となり、同じ目的（勝つため）のために切磋琢磨できる雰囲気をつくっていくこと。』つまり、「子ども一人一人が、自分の居場所がクラスやチームにあり、それを認識できる雰囲気の中で、失敗を恐れず精いっぱい活動し、チームが勝つためにそれぞれの子が知恵を出し合い、練習を工夫し、楽しさの中にも厳しさのある授業」であろう。このような理想的とも言える姿になれるようにしていきたいと考えている。それがまなざしを共有した授業ではないだろうか。

そのための手立てを考えておく必要がある。具体的なものは、授業の中で明らかにしていくことにするが、運動のもつ価値（教材観）を今まで以上に明確にしていかなければならないのではないかと考えている。